



子どもの6分の1 6人に1人が貧困状態に陥っているといわれる現在の日本。この連載では、その6分の1の子どもたちの現状と、この地域で「子ども貧困」の解決に取り組む団体の活動をご紹介します。

子どもたちの貧困

連載第1回目では、まずは子どもたちを取り巻く「貧困」の実態について、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

現代の「貧乏」と「貧困」を甘く見るな!

わしら年配教員や元気な年寄りも、子どもたちが貧乏だといって、それがどうしたんだ!と思ってきた。つまり、貧乏だって清く生きることはできるぞ!いや、正しく立派な人生は可能だろうが!貧乏に甘えているんじゃないぞ!なんでも貧乏のせいにするんじゃない!戦後はみんな貧乏じゃないか!と、矢継ぎ早の!!!の気持ちになってしまったのだ。

戦後の貧乏には明るい高度経済成長が待っているという予感があったし、苦勞したって大学へ行けば生活は楽になるはずだ……という、なんだかわくわくする希望が持てたような気がする。

例えばそれがそうならなくても、学校にいる間は、「貧乏でもいりゃ、しょうがないじゃん」そんな気分だった。しかも、ここが肝心なんだけど、勉強ができなくても、就職すれば生活はちゃんと一人前にできた。いくら中卒でも、結婚して家族が持てたし、嫁さんと子どもを食わせていけるんだ!勉強がなんだ!なんだ!バカヤローと思っていた。

ところが、こうした年寄りの思い込みは、今の時代ではまったく違って、「就職すれば……」ということとは、「就職できるんだよ」という前提の話でしょ、それ簡単じゃないし……。実際、就職しないといけないのにできないということは、そういう親を持つ子どもは、「貧乏」というより「貧困」と言った方がいい。だから貧乏と貧困は違うのだ。「貧乏」は貧しく乏しいという状況・状態を言うのみだが、「貧困」は居直れないで、困ってしまっているのだ。

まず、年寄り、とくにお金持ち高齢者のいう「貧乏がなんだ!」というのは、豊かな時代の貧乏には言えるが、現代のような「新自由主義的なグローバル経済的徹底的底なし貧困」の中では、当てはまらないのである。今の貧困がどんな状況なのかを、具体的にかつ多面的にとらえないと、結局「景気がよくなればいんじゃないかね」とか「貧しいのは気力がないからだ」という、なんと浅はかな結論になってしまう。

お金がないという貧困に援助は十分か?

貧困の実態について一部、ほんの一部を書いてみたい。もちろんデータとしてはたくさんある。関連本は、阿部彩著『子どもの貧困』(正・続)岩波新書をはじめいくつかあるし、ネットでも検索でいくらでも出てくる。ただ、貧困率や統計的に処理されたものは、なかなか実感がわかないところがあるので、ここでは、そういうデータを取り上げない。しかし、むしろ、そういうデータは意味のあることから、詳しい書籍などを参考にしたい。

名古屋市は「経済的に困りの方」の子どもたちに「就学援助支給」がされている。学校では「生活保護家庭への支給」を「要保護」といい、「就学援助家庭」を「準保護」と呼ぶ。もっと略して「要」「準」と呼ぶこともある。準保護家庭はどんどん増加している。準保護家庭は、「経済的に困りの方」として所得制限をもうけて認定される。認定されれば、給食費が免除になる。そのほかに、学用品費が1万3千円くらいから2万7千円くらいまで毎年分割して支給できる。修学旅行費とか入学準備金も支給される。

しかし、問題は「経済的に困りの方」は「経済的」つまり、生活費がないだけでなく、「家庭環境」「学習環境」「近隣環境」「健康管理」「生活意欲」など生きることに全体的に困っていることが多いのだ。基本は経済的な貧困、つまり金がないのだけれど、それが多様な貧困状態を生み出しているから問題が複雑になるのだ。

経済的貧困だけが問題なのではないし、経済的貧困が解決すれば、すべての貧困問題が解決するわけではない。経済的貧困を解決することは、安寧な生活の必要条件ではあるが、十分条件ではない。

現実の「貧困」はてごわい

5年生の村上君(仮名)の家は、シングルマザーで、母親はトリプルワークをしている。朝7時から2時間、10時から6時間、18時から5時間のパートタイムである。

病気でないのが不思議なくらいである。村上君は忘れ物が多いし、図工や文具などの準備ができない。お金はそこそこもらっているらしいが、自分で計画的に買い物したり、学習の準備をすることができない。

担任は「どうしようもない」と半ばあきらめている。だが、そもそも教員も、当の村上君も母親と学校の話をする時間、機会がほとんどないのだ。小学生なら学校のできごとを多少なりとも親と話し、「明日の用意はできた?」とか、「今日は忘れ物なかった?」などと声をかけ、「そういえば、こんどコンパスの準備をしなくちゃいけないんだ」「なにやってるの、ちゃんと準備しなさい」などと、学校生活のための動きがうながされるものだ。そういう余裕がないのだ。

経済的貧困というより、生活の中で親子の関係性を育てていくことができない貧困な関係性しかないということの問題だろうと思う。

日高さん(仮名)は、高校の教材費やクラブ活動の用具などが買えなくて、結局学校を中途退学することになった。名古屋市は高校の授業料は免除であるが、教材費などは必要になる。また、一番重要なのは、通学の交通費である。これは、家計上げっこうタイ。これは経済的な貧困、お金がないということだが、それほど単純ではない。彼女の家庭は、父親が健康を害して働けないので、母親がかなり厳しい状態で家計を支えている。父親の勤務していた会社は、現場の事故を公務災害にするのを拒否し、わずかの金銭で父親は泣き寝入りしていたのだ。労組もなく、健康を害した父親はそれをアドバイスしてくれる友だちもいなかったということだ。そして、彼女もどんどん学習意欲がなくなっていく。

「貧困」問題は大人全体の社会の課題としてとらえる

子どもの貧困は金銭的に困っていない子どもにもある。例えば、いじめや不登校で友だちとの関係が断たれたまま孤立している子どもも少なくない。

お金があっても、友だち関係や生活全般が落ち着かない、喜びのないものになっているのではないかと思うのである。

「夜、お父さんがお母さんのことを忘れなさい」といいました。どうして?と聞きました。お父さんがお母さんの話をしてくれました。お母さんは私たちの世話をしなくてゲームばかりをしていたそうです。そしてお父さんが出ていけと言ったら、お母さんは新しいカレシとでていきました。かなしいです」この家庭は、経済的貧困家庭ではない。また、決して教育に不熱心でもない。両親は少なくとも異常な大人ではなかった。しかし、父親は忙しく、母親は何かしたいけれど、何をやってもおもしろくないと言っていた。家庭での会話もなかったと言う。

子どもの貧困は、経済的貧困だけでなく、「家族というあり方の貧困」でもある。つまり、大きく言えば、「人間関係の貧困」に進化していると考えた方がいい。お金は必要だし、不可欠だが、それだけでなんとかなるものでもないのだ。

2回目からは、実際にこの地域で活動する団体の「子どもの貧困」に対する取り組み、想いをご紹介します。

著者：岡崎 勝

1952年名古屋の港の生まれ、現在名古屋市立名東小学校非常勤講師

『おせい・はやい・ひくい・たかい』編集人

『ちいさい・おおきい・よわい・つよい』編集委員

中日新聞コラム「子どもってワケわからん」連載中
子どもと親にむけて、「1日おもしろ学校ごっこ」で仲間と授業公開